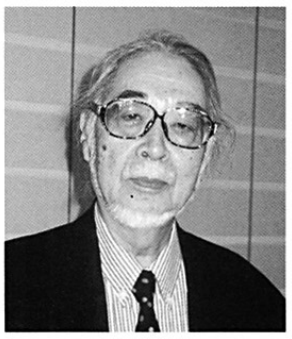
現代日本テキスタイル創造の特質

現代構造研究所所長　三島　彰



1．緒言　転機としての80年代

1990年代は、わが国の現代テキスタイルクリエーションにとって、記憶すべき画期的なエポックであった。これは戦後わが国繊維産業の復興と発展、さらに、現代マーケットに対応する構造的変質を基盤に結晶したものであるが、それが、80年代の大半をおおって進行した、世界的な捺染不況による創造土壌の激変によって促進されたことは注目に値する。

80年代の捺染不況は、世界のテキスタイルクリエーションを根幹から揺るがす深刻なものだった。伝統的捺染大国であるイタリアから、友禅以来の伝統を継承してわが国の捺染中枢の地歩を死守してきた京都に至るまで、その打撃には深刻なものがあった。このなかで成長途上地帯への生産移転から生産手段の変革に至るまで、捺染生産構造の国際的変革が進行した。そしてテキスタイルクリエーションにとってそれは、永年にわたってクリエーションの頂点として君臨してきた、図案デザイン界の権威喪失を意味していた。またこの事態は、図案と基布をコーディネートすることによって、ファッションビジネスのリーダーシップを握ってきたプリント卸の失墜をももたらした。このように80年代の国際的捺染不況は、これまでのテキスタイルクリエーションの基本的伝統的体系を揺るがす、革命的変化を引き起こしたのである。

それに代わって台頭してきたのが、これまでともすれば、捺染下地という従属的なポジションを余儀なくされていた織物編物デザインである。図案と染色ではなく、糸開発と織、編の技法によって生み出される質感、表情、機能こそが、クリエーションの新しい主役に抜擢され、さらにそれを自在に裁断し縫製するアパレルデザインとの二人三脚が、新時代を駆け抜けた。すなわちこのことは、デザインにおけるテクノロジーのリーダーシップの登場を意味し、本日の会議に即していうなら、この研究会の主力になっている繊維科学とデザイン、アートの結合強化が、80年代捺染不況がもたらした産業的帰結だったのである。

この捺染不況は何よりも、減量ジョーゼットを中心に、それまで捺染基布の主導権を握ってきた合繊ポリエステルにとって、深刻なダメージになった。そしてその袋小路から脱出するための苦闘の後末に、わが国の合繊工業は、80年代末に至って新合繊の開発に成功して戦線に復帰し、その要因を含めて輝かしい90年代クリエーションが浮上してくるのだが、一方、この間に受けた図案業界の傷は深く、いまなお伊仏クリエーションに追随する地歩から、回復していないのは残念なことである。

2．90年代をリードしたコンビネーション

繊維技法の駆使によって、織、編の新しい質感、表情、機能を生み出して行くわが国の90年代クリエーションの展開に当って、80年代に実力を蓄え、独特の創造体質を培ってきた、デザイナーブランドの果たしたリーダーシップを見落とすことはできない。

アパレルデザインにとって、マテリアルが果たす役割が決定的なものであるとするなら、新しい革新的なデザインを、戦前戦後のエレガンスを引きずっている、旧来のプリントやツィードによって構成することは至難の業である。そのような状況のなかでたとえば三宅一生氏は当初、わが国の伝統的民衆素材や、時には日常的な工業資材などを使うことによって、彼が目指すモダンで革新的でナチュラルな世界を描き出そうと試みた。

しかしやがてテキスタイル産地のなかから、そのような新進デザイナーのニーズに応えようとする、新しい動きが台頭してくる。そしてこのような産地ニュークリエーションは、併せて、既存の商社卸による流通体系から脱出したいという願望によって裏打ちされていた。たとえば織物研究舎の松下弘氏は、卸を除外して直接デザイナーに売るために、東京に展示会を開き、それはやがて、川久保玲氏と共同出資する現状の事業形態に結晶する。八王子、みやしんの宮本英治氏は、直接三宅氏にアプローチし、桐生の新井淳一氏も川久保氏や三宅氏と直接コンタクトしている。後に宮本氏がテキスタイルネットワーク、ＴＮ展を組織して、産地とアパレルとの直接ルートを開発したことのなかにも、産地クリエーションが流通変革への止みがたい欲求と結びついていたことを見て取ることができる。

それだけではない。革新的デザイナーと産地クリエイターの間には、ナチュラリズムという思想的共通項が、多く見出されたことにも注目したい。そしてそれに平行して、福井の合繊先染に特化する特異な産元問屋、吉村仙松商店、吉村晃一氏と三宅氏との提携に見られるように、シャープでメカニカルな現代感覚や、コンピューター利用などハイテクに対する積極的な姿勢もまた、もう一つの共通項だった。このような革新的ナチュラリズムと先端的テクノロジーとの結合、そして産地直結の流通革命への指向が、90年代テキスタイルクリエーションの先端に輝いていたことに注目したい。

さらにこの産地と巨大都市のクリエーティブな先端を結合させたもう一つの要因として、戦後わが国のデザイナーブランドの特異な事業形態をあげておかなければなるまい。欧米のデザイナービジネスは、デザインを企業に売ることによって完結しているが、わが国のデザイナーは、そのデザインをみずからアパレルに製造し、みずから販売する事業形態からスタートし、今でもそれがデザイナービジネスの主流になっている。それはわが国のアパレルが、デザイナービジネスを取り込んで収益を上げるノーハウを、昨今に至るまでマスターできないできたことによる。みずからデザインし、みずから製造販売することは、デザイナーにとっては大きな重荷であるが、それに成功した時には、デザイン意図がストレートに製品に反映し、さらに消費者との関係もストレートになる。このようなわが国のデザイナービジネスの特性が、デザイナーと産地クリエーションを直結させる効果に繋がった。さらにそこには、産地クリエーションとデザイナービジネスを直結する先鋭なクリエーティブコンバーターを生み出し、一方デザイナーブランドの側にも、マテリアルに精通する担当者を生み出すことになった。

ところでテキスタイルに対するデザイナーの指向は、必ずしも一様ではなく、そのデザイン体質によって異なっていた。このなかで三宅氏は、産地新提案に対して最も積極的に反応した。デザイナーブランドのテキスタイル担当の草分けとして伝説的存在になっている皆川魔鬼子氏の鋭く幅広いリサーチは、絶えずテキスタイル業界の新開発をとらえ、三宅氏はそれらに含まれている未知の可能性を、鋭いモダンデザインのなかに顕現していった。このようにして彼によって方向付けられ、世界に紹介された新技法は、枚挙にいとま無い。しかし彼は、プリーツプリーズやＡポックのように、アパレルそのものの革新路線に取り組むようになってからは、シャトル織機による重く厚い割高なテキスタイルに距離を置くようになり、革新超高速織機による、薄く軽いシャープな表現へ、重点を移行させていくようになる。しかしそのことによって、愛する産地人材との結合が失われていくことを恐れ、そのデザイン主流の他に、ペルマネンテのようなナチュラリズムブランドを維持し続けている。また津森千里などの同系グループブランドが、一生の後を追って、絶えず新鮮なテキスタイル開発に、鋭い反応を示し続けていることはいうまでもない。

川久保玲氏とその素材部門を支えている松下弘氏によって追求されているものは、三宅氏に代表されるデザイナーのテキスタイル開発の在り方と、基本的に路線を異にしている。その中軸にあるものは、一見何の変哲もないテキスタイルのなかに秘められているアドベンチャーで、それは旧来通りのものだったが、そこにはただ一つ、これまで不可能と思われていたところまで糸を減量するという技術的挑戦だった。その試みは成功してその合繊アパレルは、信じがたい軽さとコンパクトさを実現したのである。ウールのスーツ地でも彼らは、水洗いして天日に干すという、一見何でもないことのように見えて、実は危険な挑戦を成功させ、新しいスーツを実現してみせた。また彼女が提起した衝撃的な凸凹ルックは、福井の産元問屋であるタックによって実現された経緯ストレッチ織物によって始めて可能になったものだったのだが、これは経糸のストレッチ糸に水溶性ビニロンなどのＰＶＡ糸を巻いて補強し、製織後水洗でＰＶＡを溶かすという方法によって、始めて可能になったものである。これはその後の糸、綿両段階におけるＰＶＡ使用の国際的ブームに繋がった。

御三家と呼ばれるもう一人である山本耀司氏も、他の二人とは異なる体質を持っている。何よりも挑戦的なカッティングに賭ける彼が、マニアックなまでに追求しているのは、尾州の丹羽正毛織、丹羽正蔵氏との年来の取り組みのなかで実現されている、ギャバという定番中の定番に秘められている可能性の限りない追求なのである。

さらにヨーガン・レール氏の存在も特異である。60年代以降、ポップモダンの特異な表現でスタートした彼は、今では現代ナチュラリズムの代表的な存在であり、テキスタイル開発、アパレルデザイン、店舗運営を一手に行うドレスメーカーとして、国際的にも注目を集める存在になっているが、特に、そのチェック、ストライプという定番中の定番のなかに、ありとあらゆる可能性を追求するマニアックな姿勢や、アジア生産の特異な使い回しを含めて、他の追随を許さぬオリジナリティを実現している。

一方、テキスタイルデザインの側にも、それぞれ独自の体質が見られる。たとえば新井淳一氏は、民芸運動家としても独特の地歩を占め、テキスタイル作家としての体質が強い。思想的な背景を持つナチュラリズムの、コンピュータージャガードを駆使する表現と、真空蒸着からステンレス糸使いに至るハ